

平成29年度第2回千葉市文化芸術振興会議議事録

市民局生活文化スポーツ部文化振興課

1 日 時

平成29年12月20日（木） 午前9時30分～

2 開催場所

中央コミュニティセンター8階 千鳥・海鷗

3 出席者

（委員）神野委員長、早川副委員長、椎原委員、関委員、瀬崎委員、河野委員、岩間委員
（事務局）安藤生活文化スポーツ部長、小名木文化振興課長、渡邊文化振興課長補佐、川口文化振興班主査、島村主任主事、山口主任主事、樺澤主事
小山千葉市民ギャラリー・いなげ所長、田辺千葉市美術館副館長、積田千葉市美術館事務長、山根千葉市美術館学芸員

4 議 題

- （1）文化施策の評価方法について
- （2）平成30年度千葉市芸術文化振興事業補助金について

5 議事の概要

- （1）文化施策の評価方法について
文化施策の評価手法について意見交換を行った。
- （2）千葉市芸術文化振興事業補助金について
千葉市文化芸術振興事業補助金の補助事業選定にあたり講評・意見交換を行った。

6 会議経過

< 事務局説明① >

【神野委員長】

ただいま事務局から、前回の会議で私達が評価対象事業の評価に関して討議した内容を反映させた2次評価シート案について説明がありましたが、これについてご意見等がありましたらお願いします。

5効果（地域活性化）の文章ですが、この内容だと否定的な内容と受け取られかねない。この事業が即効性のあるものではなく、長期的な視野で人材を育てる事業であるということをしかりと認識することが重要であるという趣旨であったと記憶しているがどうか。

【川口主査】

委員の皆様からの意見を基本的にはそのまま転記しているが、その文言の裏の趣旨を図りかねていたので、今回いただいた意見を踏まえ表現を修正する。

【神野委員長】

私の記憶では、教育的な視点が非常に評価されたと記憶している。ただそれは即効性があり、すぐに地域が活性化されるようなことではなく、長期的立場に立った授業だという位置付けが必要だというように記憶しております。よろしくお願いします。

【椎原委員】

地域の活性化をするといったときに、地域の何を活性化するのか。地域の賑わいを創出するのか、地域住民が文化芸術を自由に表現することが出来るという意味での活性化なのかといった点が分かりづらいつらと感じた。今回のケースのように、ワークショップで地域を活性化することはできないと思うので、この考え方についてはもう一度確認したほうがよいと感じた。

【川口主査】

評価指標案の地域活性化の表現をもう少し具体的にしたいほうが良いということか。

【神野委員長】

そうですね。活性化というときに、イベントで人が集まって、そのイベントがきっかけで地域に対する関わり方が変わってくるというようなぎわい創出としての活性化もあるだろうし、1人1人が主体的に何かをしようとする人材が育って、それぞれが活発に活動しはじめるという活性化もある。両方とも含まれると思いますが、その辺を大きくりに活性化と言ってしまうと問題が出てくる。この点に関しては評価の際にも意識することが重要で、椎原委員からご指摘があったように計画の中でどのように表現されているかについても一度確認をしたほうがよいと思います。

【瀬崎委員】

前回会議に参加していないんですが、ななめな学校とはどのような授業なのですか。

【神野委員長】

メディア芸術の授業に取り組まれて4年目になると思います。

最初、インタラクティブな映像のイベントをやっていて、それはそれでにぎわい創出はできたんですが、主催者がイベントで人を集めてもあまり変化がないということで、メディア芸術についての知識・関心を持ってもらうため、子供向けの教育プログラムのワークショップを複数やる方向に前回からシフトをして、それがななめな学校としてスタートし、今回2回目が終わったところです。

【瀬崎委員】

先駆的な学校ということですか。

【神野委員長】

学校教育の中でこういうことを勉強しましょうというものがあるとしたら、この授業はななめから見てもみましょうというもの。そこにクリエイターやアーティスト、デザイナーなどクリエイティブな仕事をしている人たちが関わっている。参加者を公募して、いくつかのコンテンツを半日から一日参加するという感じです。

【瀬崎委員】

日本では、何かするときに相手の年齢に合わせて、できる範囲を決めつけるところがあるような気がします。大人も含めて、その人の興味や環境によって興味の範囲や成熟度が変わってきます。特に文化芸術の場合は小学生対象、中学生対象などと制限するのは良くないのではないかと思います。

【神野委員長】

対象の問題ですね。ご意見、お願いします。

【小名木課長】

平成27年度までは小学生を対象に体験型イベントを実施していました。平成28年度からは小学生対象のワークショップ形式にして、身近なものを題材に子どもたちが自分視点で考えて表現してもらうということを狙いとして実施しています。

【神野委員長】

今回は教育の専門家が関わるということで、依頼を受けて私もこの事業に関わることになりましたが、対象に関しては色々検討しました。研究室の学生達が企画したワークショップに関しては、低学年・高学年でどういう風に組み合わせをするのか、組み合わせた時に高学年しか意見が言えない状況が出来てしまうと成立しないし、低学年にあわせると高学年がつまらなくなってしまうし、どういう風にバランスを取るかという点が難しい問題で、また全員が楽しいことにすると教育的な目的が達成できないと

いう問題もあります。

もう1つは 大人向けにこういうワークショップをやるということの必要性を感じていて、関委員と私の研究室・千葉市美術館と一緒に「自分の枠をはみ出してみよう」というワークショップを今年やっているが大人の参加者がいない。ななめの学校は、有料にも関わらず、申込開始してから1日で講座が埋まってしまうぐらい人気がある。そういう意味でも子どもの段階から自分から何かにチャレンジするという人材を育てるということは重要なことであります。やはり、瀬崎委員がおっしゃるように、世代を限定せず幅広くということは重要かと思えます。

机上に写真展のDMがありますが、千葉大の学生向けの写真のワークショップです。千葉市民ギャラリー・いなげに協力いただいて、学生だけでなく一般の方にも参加してもらい、世代的には70代の方から18歳位の方が周りをどのように見ているかをシェアしながら、自分の写真表現を通して、自分のことを語っていくということを繰り返して展覧会に至っています。これも千葉市と一緒にやっている事業と言えるかと思えます。

【岩間委員】

地域活性化の活性化とはどういう基準で評価するのか。スポーツの場合は記録が伸びた、競技人口が充実したなど目に見える形で分かると思うが、文化芸術に対しての活性化は何を基準にしているのか。

【神野委員長】

人が大勢集まったから活性化と言えるわけでもないですし、この辺が文化事業の評価の中で1番難しいところなので、この評価シート自体もどのようにしてより良い評価にしていくかということになると思えます。

【岩間委員】

個人的な意見ですが、活性化を目標にしなくてもいいのではないかと。分からないことを目標にしても、評価しようがない。

【早川副委員長】

私が所属している千葉市文化連盟はいくつかの文化団体が集まって一つの団体ができている。時代の流れの中でめざすところが変わってきており、以前は活性化というと市民の中に趣味を持つ人を増やしていくことだったが、先程椎原委員もおっしゃったように1つのにぎわいを作っていこうという流れになってきて、例えば自分たちの活動を発表することを重く見るようになってきている。

【椎原委員】

地域活性化について、振興計画では「少子高齢化・人口減少社会における町並み、地域の歴史等を地域資源として戦略的に活用し、地域の文化芸術の継承を図っていくことで、交流人口の増加や移住につなげるなど、地域の活性化を図る新しい動きを支援し」と書かれている。これを評価指標に含めるべきか否かは重要な問題かなという気がします。ワークショップで地域を活性化するという時に市が戦略的にやるのであればそれもあかなという感じがします。その時に活性化が生まれるのではないかと。基本

的には振興計画に沿って評価すべきで、計画に書かれてないことをここで評価することはできない。現在の指標にこの点が含まれていなければ、次の指標に盛り込んでいけばいいのかなと思います。

【神野委員長】

活性化という言葉は、とても便利な言葉なので使ってしまったということもあると思います。文化芸術の計画なので、その中身を具体的に決めるべきではなく、ある程度の幅を持った方が良さだろうと思います。その中で賑わい創出は明瞭にうたわれているが、ななめな学校に関しては、その先にあまり可能性が見えなかったということかと思います。椎原委員がおっしゃったように、計画で欠けている部分があれば、それを補うような文言を評価シートの中で補足をしながら進めていくべきなのかなという気がしています。他はいかがでしょうか。

文化振興財団のスタートアップチャレンジ事業についてはいくつか注文がついていますが、基本的には期待をしているということの裏返しと理解していただきたいと我々は思っていると思いますが、いかがでしょうか。

【早川副委員長】

基本的な考え方の積み重ねが全体に広がって行くということなので、いいと思う。

【神野委員長】

評価の新しいチャレンジというのは、事業を精査する中でより良い事業を作っていただきたいということ。今回2つの事業について1次評価、2次評価と進めてきており、今までにはないプロセスだと思います。これを財団がどのように解釈して新しい提案、事業をしていくのか、すごく期待しています。

それでは、本日の評価対象事業と評価の進め方について事務局から説明をお願いします。

< 事務局説明② >

【神野委員長】

内容に関して、ご意見いかがですか。

事務局からの説明のポイントとしては、当初は全ての事業について簡易な1次評価シートを使って評価をする方向でしたが、検討した結果、評価シートを簡易的にすることが難しいということで、それよりは5つの基本施策の柱を尊重して最大5事業を選定し、しっかりと内容を見ていくような方法の提案であったと思います。それが、市の文化事業評価の一つの目安になっていくということで、それが全体を引き上げていくことを期待するということです。

また、委員の視察に関しては、委員の皆様のご予定や予算の範囲内なるべく見ていただく方向で進めていくということです。予算の話ができましたが、最大何人位視察ができそうですか。

【川口主査】

まだ予算は確定していませんが、予算要望としては2事業分で1事業に対して2名と見込んでいます。

【神野委員長】

特に意見はないようですので、その方向で進めていくということでお願いします。

続いて、「美術館展示 CCMAコレクション いま／むかし うらがわ」について、1次評価シートの説明をお願いします。

< 千葉市美術館 1次評価シート説明 >

【神野委員長】

それでは、1次評価シートの内容についてご意見ををお願いします。

【椎原委員】

質問ですが、1基本政策との適合（2）達成度について、来館者数の目標設定を8千人とした根拠を説明してください。通常の企画展に比べて少ないのか、多いのかなど。

【千葉市美術館 田辺副館長】

ここ何年か、夏に若年層向けの企画展を開催しているので、その入場者数が1つの根拠になりますが、大枠では、千葉市から1年間の数値目標を提示され、それを振り分けているということもあります。

【神野委員長】

実績値をベースに、内容を見ながら予測を立てているということですね。

【関委員】

この事業は、若者たちに美術館について親しんでもらうための取り組みなので、この展覧会に参加した人より、次の展覧会にどれくらいの若者が来たのかが大事な気がします。即効性のあるものではないので、次にすぐ影響が出るという話ではないと思いますが、2（2）「こども・若者」のところで、若者がこれだけ来たと書いてあるが、これが今後どうなっていくのかということが必要で、1回だけ若者が来て良かったということにならない書き方があるのではないかと私は思います。

【神野委員長】

今回で入口を設けて、浮世絵や現代美術などに興味を持ってもらって、これから開かれる企画展に来てくれるということを期待しているわけですが、その文言がないということですね。やっていないということではないので、これは反映したほうがよいと思います。

【早川副委員長】

2（1）「市民主体」というところで、「外部からの視点によって美術館側も新たな気づきを得ることができた」と書いてあるが、どんな点に気づいたんですか。

【千葉市美術館 山根学芸員】

今回、インターンや実習生など外部の人と一緒に企画をしたことで、美術館の職員であれば当然のように使っている言葉も、来館者目線で考えるとこういう言葉で説明しないと分からないであるとか、こういうステップを用意した方が参加しやすいとか、利用者に寄り添うような具体的な意見をもらうことができ新たな気づきが得られました。

【神野委員長】

「ちがうてん にてるてん」は、千葉大学の博物館学芸員の資格の実習の一環として実施しており、学生が千葉市美術館のコレクションを用いて展覧会を企画するもの。学生は勉強はしているが、知識や経験は十分ではなく、素人的なところがかえって斬新な企画を生み出したりする。例えばこの作品は美術館の学生員はあまり重要ではないと思っているが、別の部分に注目すると面白い作品だったり新たな発見があったりします。

【椎原委員】

来館者アンケートとは別にインターンや実習生のアンケートを反映したほうが、達成度や市民主体の指標になりうるのではないかと思う。危惧するのは、博物館実習生はそれをやらざるをえないという状況なので、それを皆が本当に好んでやっているのか。これを実習として行って、どの位の達成度があるのか、これは市がやることではないが、教育現場からすると気になります。

【神野委員長】

ボランティアやインターンの方へのアンケートに関しては、この事業の価値を高める可能性があるもので、その視点から活かせることがあるのではないかといいことだと思えます。実際にはどうですか。

【千葉市美術館 山根学芸員】

ボランティアにはアンケートではなく、反省会という形で意見を集約している。また、インターンからは、実習後に詳細な振り返りの報告を受けている。

【神野委員長】

実習に関していうと、千葉市美術館は2つ実施していて、一つは今回の千葉大学の「ちがうてん にてるてん」という形で成果展示を行っているもの。もう一つは、美術館自体が大学の学生を引き受けて実習をするという形でしっかりやっていただいているかと思えます。

【椎原委員】

5（1）「地域活性化」について、にぎわいの創出のためにある程度は貢献できたとあるが、「ある程度」という言葉を使った理由はありますか。

【千葉市美術館 山根学芸員】

祭りの当日は美術館にイベントがあってもなくても人出はある。「ある程度」は美術館に来た人たちが

市内を回遊してにぎわいの創出に繋がったのではないかと思うが、検証が出来ていないというのが実際のところですね。

【神野委員長】

なかなか来た人ひとりひとりを追跡できないと思う。ある程度来たから、ある程度効果があったとしか言いようがないということですね。

【椎原委員】

この状況で、評価が妥当になったというのは、ちょっと評価としては厳しい。

【神野委員長】

美術館は展覧会事業をやるのが基本だけれど、そうではなく、普段来られない人達を誘いこむ事業をやったという事実はあるということかなと思います。

【河野委員】

美術館には高齢者しか来ないイメージがあるが、この事業をきっかけに若年層が美術館に親しみを持ち、リピーターになっていただくことは活性化という部分でかなり効果があると思います。予算の問題で難しい部分もあるかと思うが、単発的ではなく継続的に年に何回か実施し、若年層が美術館を利用していただけるとは地域としてありがたいことだと思った。

【神野委員長】

これは千葉市美術館だけの問題ではなく、あの地域全体を見た時、中心市街地が急速に空洞化していて、美術館だけが活発に活動している現実がある中で、若年層をターゲットとしてある程度成果が見える形で示していただいていることは非常に評価できるということですね。

千葉市美術館は浮世絵を中心とした近世絵画の美術館ということで全国的にも評価が高く、来館者に高齢者が多い状況の中で、どういう風に次の若い世代につなげていくか、あるいは、中心市街地との関係の中でも若い世代に来てもらうにはどうしたらよいかということから、切り口をソフトに敷居を低くして、チラシに骸骨を大きく出すことによって人を呼び込み、教育プログラムをたくさん実施することで、来館者の年齢層に変化が見られるということは評価すべきことで、今後も継続的に取り組んでいきたいと思います。

市長が公約として掲げている美術館の機能強化の取り組みが始まっていると伺っています。美術館のコレクションを生かした展示機能の拡充も次に取り組まれることだと思いますので、今回は試行としても高い評価ができるのではないかと思います。

一つ心配なのは、教育プログラムがとんでも多くて、理想を持っているとどこまでもやってしまい、学芸員のワークライフバランスが壊れてしまうという心配がある。これだけのことを続けていくとなると人的な資源も少し拡充してもいいのではないかと思います。評価シートに書くことではないが、美術館がブラック環境にならないようにしていただきたいと思う。

次に、千葉市民ギャラリー・いなげ展示「創造海岸いなげ展」について、1次評価シートの説明をお

願います。

< 千葉市民ギャラリー・いなげ説明 >

【神野委員長】

それでは、1次評価シートの内容について、ご意見を願います。

【早川副委員長】

千葉市民ギャラリー・いなげは、千葉市美術館の分館の位置づけですか。また、この施設はどのような目的で作られたのですか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

地域とのつながりが深いので、コンセプトとしては、地域の文化の拠点です。

【早川副委員長】

例えば、どのような方の絵を展示してもらおうと思っていたのですか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

千葉にいる若手作家の発表の場です。

【早川副委員長】

それは、定年退職したような方は除外するということですか。

定年退職して地域で文化芸術活動をしている人にとっては、この施設に展示することが憧れだったりしますが、申し込んでもなかなか使えないという声が団体から入ってくるので、あの美術館は何のために作ったのかお聞きしたのです。

【千葉市美術館 田辺副館長】

経緯を知っていますので、私から説明します。

当初は、市民ギャラリーとして絵画サークルなどへのスペースの貸し出しが中心だった。料金が安いので、絵画サークルなどが申し込んでも当選しづらいということはあった。一方で、鑑賞にも寄与していこうということになり、美術館の作品を持ってきて展示などもしていたが、ギャラリー側の負担が大きということと、平成19年か20年位にギャラリーとして独立し活性化していくことが望ましいとの市の判断があり、それまでは職員も美術とはあまり関係ない職員が貸出の業務だけをしていたが、そこに学芸員を置いて、貸出業務だけでなく、展覧会の企画も行うことになり、サークルとの接点を持ちつつ、地域の若手の作家を紹介するように方向転換をしました。

【早川副委員長】

分かりました。市民ギャラリーを使えないとなると、昔から地域で活動しているような方の発表の場

が公民館などになってしまう。文化振興という観点からは、専門家だけでなくそういう地域で活動している方への支援という視点も残していただきたい。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

実際に地域の方たちが小規模な展示会を積極的にやっていたりしている現状があります。

【早川副委員長】

評価シートに「従来の利用層は定年退職後に趣味で絵画制作などをされるサークルなどに限られていた。」とあるが、こういう方々の発表の場もぜひ確保しておいていただきたいという意味です。

【神野委員長】

市民ギャラリーの基本的な性格は、早川副委員長おっしゃたように定年退職された方々の発表の場所あることは基本的に変わってない。課題として、趣味で活動している層が増えていない現状がある。今後を考えた時に、発表をしたいという人をどのように育成するのか、次世代にどのように引き継いでいくのかを模索しているのかと思います。

【早川副委員長】

専門家の絵だけを並べるのではなく、地域で活動している人々の成果発表の機会を閉ざすことではないということを確認したかった。

【神野委員長】

評価シートでは、従来やられてきたこともしっかり網羅して書いていただいたほうがよい。排除していると受け取られるのは損だというご意見です。

【関委員】

アンケートの意見を大事にしている印象があります。アンケート結果を持ち出すのに、1（2）目的の達成度のところで、アンケート結果から「作品を通じて田園風景の美しさを再認識した」などの意見が多く見受けられ、地域資源の魅力や特徴を展示方法や作品から感じ取ってもらうという目的は達成できたとありますが、千葉に田園風景というイメージがない。田園風景の美しさを再認識することに関しては大事なことだと思うが、地域資源の魅力や特徴を感じとってもらうということになってしまうと、例えば、千葉の昔の田園風景など文章に何か言葉が足りていない印象を持った。

【神野委員長】

緑区とかにあります。

【関委員】

田園風景であれば、もっと他の地域はありますから。

【神野委員長】

千葉のという表現が苦勞なさっているかな。

【関委員】

アンケートをそのまま載せると、疑問が出てしまう。

【椎原委員】

アンケートをそのままもってきて評価を書くのに苦勞している。アンケート中心主義という感じもします。

【神野委員長】

前回の文化振興財団とは対照で、ストイックな傾向が強い。目指すところを明確に高く目標を設定して、自己評価をするという形で、厳しい評価が出ていることと、来場した人たちの素朴な素直な意見をできるだけ拾わなくてはということに縛られてすぎているというのがあるので、主催する側はそれを翻訳する形で、次のビジョンに繋げるような作文をするべきではないかということ。それを否定するものではない。

【関委員】

作品を通して田園風景の美しさを再認識したということが、地域資源の魅力となると言葉が足りないと思う。

【神野委員長】

文言として、意見を抽出して、「地域の魅力をアート作品を通して再認識する機会に繋がった。」という意見も多く寄せられたみたいな形にするといいのではないかということだと思います。

【椎原委員】

そういう表現だと、例えば抽象画のような、エッジの効いた優れたミニマリズムの作品が出てきた時に展示できなくなってしまう。たまたまそういう表現が出てきた時に、それを使うことはいいが、そこに頼りすぎるのは危険かなと思う。表現のクオリティーについて、プロの目からの評価をこの評価の中に取り込むべきではないか。

【神野委員長】

踏み込んで、なぜその作家をとということもあって、それに対する反応とうまくつなげる形で評価をすべき。受け手側の意見が正しわけではなく。地域資源ということであると、絵に表現された田園風景だけが資源ではなく、千葉で頑張っている人達を紹介すること自体が地域資源の発掘の中でとても重要なことである。企画自体が価値のあることをやっていることを前面に出してもいいのではないかということです。

【河野委員】

今回の事業は5年続いているという話ですが、指定管理の中に最初から組み込まれているのか、自主事業としてやられているのか。

【神野委員長】

指定管理を受けるときに最初からこれをやることを謳っていたかどうかという質問ですね。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

当初からの提案事業です。

【河野委員】

目的が、若手芸術家を広く市民に知っていただくということで、来場者目標800人のところ、実績1,500人の市民に作品を見ていただいたということですが、作家を知ってもらうだけなら、もっと人が集まるところで展示をしてあげてもいいのかなという感じがします。展示を通して地域資源の魅力を知ってもらうということで、デイモン・ベイさんは千葉の風景を展示されていて地域を知ってもらうことがあります、他の作品は千葉に関わりがあるとは思えないということで、目標設定とやられていることが合っていないのではと感じます。

【川口主査】

今回、評価シートを提出いただいた際に難しいなと思った点があります。

今回の事業の振興計画上の位置付けは、基本政策5 文化芸術において千葉の魅力を「活かす」(1) 魅力ある資源の活用で、「地域資源や歴史的資源を文化的側面から見た魅力や特徴を活かすとともに、文化的活動などを分析発掘し、オリジナリティーあふれる創造事業を実施していきます」というところに該当しますが、先程委員の皆様からも意見が出ましたが、「地域資源」をどこまで膨らませるかということが難しく、必ずしもギャラリーがやっていただいた事業はこの狭いポイントだけでやっている事業ではなく、他にも(2) 魅力ある人材の活用ということにも関わりがあります。振興計画に基づいて一つの基本施策を基に評価をしようとする、苦しい評価シートになるというのが難しいところです。

【神野委員長】

1つの柱だけで評価をしようとする、十分な評価できないということですね。

【川口主査】

そうです。狭い視野ではなく、広い視野でやっていただいている事業でも、この1次評価シートに載せるとなると狭い評価になってしまうという点は申し訳なく思う。

【神野委員長】

そうですね。逆に振興計画の柱に沿って、考えていくとつまらない事業になってしまいます。

【椎原委員】

おそらく地域資源というのは、旧神谷伝兵衛稲毛別荘がベースにあるのではないかと思います。

総事業費が24万1千円で何ができるのかと思う。本当に若いアーティストを発掘して支援していこうとした時に、ポスター代・チラシ代位の予算で本当に振興ができるのか、予算はどうにかならないかという気がします。

【早川副委員長】

ギャラリー・いなげに制作室があるが、あそこは地域に住んでいる人たちが利用して制作して展示するとか、そういう意味合いが大きかったのではないかと思います。本当は専門家が展示したり、何人入ったということが、作った目的ではないのではないかと私は思っています。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

今回の事業は専門家が発表する展覧会ですが、メインは地域の方々の作品の展示です。

【神野委員長】

この事業が市民ギャラリー・いなげの活動を代表する形ではなく、新しい課題に対して挑戦をしている事業として出てきている。その中で予算の妥当性というのは、持続性を考えた時に重要な問題です。財政的に難しい中ではありますが、検討していただきたいと思います。

また、ここで展示されている方々は美術館でいきなり展示するという実績を持っていないけれど、今後可能性がある方々という位置づけ。美術館は権威がありすぎるが、その中間で発表するチャンスをどこで保証するかという問題もあって、市民ギャラリー・いなげの機能の中にその部分を持たせることもあったのかなと思います。館長がご説明いただいたように、市民の制作と発表の場を中心にしていることは変わっていないと思います。

【椎原委員】

このアーティストはどなたが選んだんですか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

担当の学芸員です。

【椎原委員】

千葉に関わりがあるというのは、市ではなく、例えば市原市や船橋市、鎌ヶ谷市に在住でもよいのかなど基準があるのですか。

【神野委員長】

千葉市美術館自体が千葉関係の作家は千葉市に限定していない。千葉市に限定すると範囲が狭すぎて該当者がいないこともあって、千葉にゆかりがあるということを広い範囲で見ているところでしょうか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

はい、そのように考えています。千葉市芸術文化新人賞受賞者なども取り入れて、なるべく千葉市に近づくようにやっていきたいと思っています。

【神野委員長】

千葉に住んでいる人が千葉で活動しているわけではないので、把握するのが難しいという課題があります。私は山梨で仕事をしていたのですが、地方は情報が集まってくるから楽ですが、千葉の場合は千葉をメインの活動場所と考えていない人がほとんどの中で、千葉市に関わりのある人を捜すのは、なかなか簡単ではないと伺ったことがあります。

【岩間委員】

美術というのは、それぞれの感性で絵筆を取っているで、美術館を地域性などで縛らないほうがいいと思う。千葉の美術館でピカソやルノワールがあっという間に構わないし、それが充実しているところが全国的に波及するという事もあると思う。

【神野委員長】

難しい議論で公共性をどこに置くのかということで、良い物を見せるということが公共性として重要になれば地域性に縛られることはないけれども。

【岩間委員】

美術自体に公共性はないでしょう。

【神野委員長】

だとしたら、美術館を市が扱うこと自体がおかしいということになってしまう。

【岩間委員】

運営自体は、地域に貢献しなければいけませんから意味のあることではしょうけれど、美術作品そのものを枠で縛ってしまうと鑑賞する人がいるのかなと心配します。

【神野委員長】

絶対的に良い作品などないわけですから選ぶことしかできない。その為に専門家があります。専門家の基準は日本で美術館を運営していくことと、フランスで運営していくこととは条件は違うわけで、置かれている状況の中で考えていくしかない。日本の場合は、作り手側の存在感が大きい美術の歴史が長く、美術館の中に制作室があることは、日本の大きな特色であった。それは良い面もあれば、悪い面もある。それが時代の変化とともに変わってきているし、地域限定で地元の作家を優遇することに関しては、どのバランスで行うのか正解がないので千葉市美術館も苦労しながら設定しているでしょうし、市民ギャラリー・いなげに関しては、やり始めて試行錯誤しているという状況だと思う。千葉枠でくだら

ない物を発表するのはいかなものかということはそのとおりだと思いますが、この会に質については問う資格がないと思います。

【潮崎委員】

ギャラリー展示の入場料はアマチュアとプロで違いがあるんですか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

入場料は一律無料です。

【潮崎委員】

アマチュアとプロの入場料を平等にしてしまうと、質という意味では限界があると思います。もし、若手の作家を育てるという企画であったならば、プラスアルファで芸術に興味のある市民が芸術を志す人を応援するような工夫があると良いと思う。例えば、作家がお金をもらえたり、展覧会を開く機会を今後10年とか20年のスタンスでもらえるなど、何かメリットがあるといいと思います。

【神野委員長】

難しい議論だと思いますが、例えば水戸美術館は有料の展示室と同時に無料の若手の発表する場がある。そこで、リストを作ってきちんと展示をするということを業績にして、次の機会につなげてもらうということでしょうか、これが妥当であるかどうかは議論の余地はあるかもしれません。

【関委員】

若手アーティストを育てるとかいうと、しょんぼり感があって嫌だなと思います。

【神野委員長】

若い人達は発表の機会は欲しいので、それを買いたたくみたいなことが起きがちなので、持続的な文化の発展ということを考えると、それも考えていかなくてはいけないことだと思います。

これは、先ほどの椎原委員の予算に関してのご意見ともつながるかと思います。

【関委員】

アンケートで、「有名な芸術家ではなく、細々と活動をしている芸術家のことが初めて知れてよかった」とありますが、芸術家にとっては、これは褒められていない。

【神野委員長】

最初から色眼鏡で見られているという感じが強まってきている。どのような発表の機会の提供がいいのか、引き続き検討していただきたいということでもよろしいでしょうか。

多岐にわたるご意見が出ましたが、全体として、ギャラリーの役割がこの事業に集約しているわけではないので、その点は文言に注意していただきたいということと、若手の発表の機会という時に、若手に対してどのような態度で臨むのかということが、今後問われていくということかと思っています。評価に

については、このあたりの発言を拾いながらまとめていただければと思います。

【早川副委員長】

旧神谷伝兵衛稲毛別荘を新たに展示スペースとして使ったことが好評だったとあったが、このスペースは展示スペースとして恒常的に使えるのか。

【千葉市民ギャラリー・いなげ 小山所長】

市民ギャラリー・いなげの企画展の会場としての使用のみで、一般の人が使用するということは今のところ考えておりません。

【神野委員長】

主催事業として活用することは考えているが、一般市民に展示場所として開放することは、文化財としての性格を考えた時に責任を負えないので考えていないということです。

【早川副委員長】

文化財をこのように使うことは今まではなかったんですか。

【神野委員長】

いままでも活用していましたが、ギャラリーの意識が変わってきているのと同時に、文化庁の施策でも、文化財を文化財のまま活用するだけでなく、その他の連携により魅力を生かしていくということが謳われている中でということです。

以上で、1次評価シートに関しての議論は終わりにしたいと思います。

続きまして、今後の会議スケジュールについて、事務局より説明をお願いします。

<事務局説明③>

【神野委員長】

続きまして、議題2「平成30年度千葉市芸術文化振興事業補助金について」事務局から説明願います。

<< 非公開議事につき、以下省略 >>